



## 校長室の窓から

# 「おまえの混ぜ方には真心がない」



～ U先生から教わったこと ～

今から30数年前、初任で勤めた中学校でのこと。当時、部活動の指導が終わると、顧問が体育教官室に集まって、インスタント・コーヒーを飲みながら体育主任のU先生を囲むように語らうのが日課となっていました。



私は一番年下で、一番後輩だったのですが、いつもコーヒーをいれてくださるのは、3歳年上のA先生でした。A先生は早稲田大学陸上部出身で、故中村清監督の教え子。つまり、心身共に鍛え抜かれたアスリートです。

ところで、近年は社員の待遇を派遣社員か正社員かという採用区分によって決めるのではなく、行っている仕事の内容によって決めるようになってきました。しかし30年前は、正式採用と講師との間には、仕事の中身ではなく、その採用区分によって様々な上下の別がありました。

そんな環境だったこともあってか、講師採用だったA先生は、一番の後輩であるかのように振る舞っておられました。

あるとき、いつものように体育教官室に集まり、そしていつものようにA先生がコーヒーの準備を始められました。すると、体育主任のU先生が、

「久村、お前いれろ。」

私は「はい。」と返事をして、自分なりに『ちゃんと』コーヒーをいれて配りました。

まず、U先生に。

それから野球部のM先生・・・「はい、どうも。」

同じく野球部のH先生・・・「はい、ありがとう。」

バスケット部のF先生・・・「サンキュー」「さて、久村さんがいれたコーヒーはどんな味がするかな？」

私「??」（誰がいれても同じでしょうが。）

そしてA先生。なんだか申し訳なさそうに「ありがとうございます。」

その時、カップをみつめておられたU先生が一言、

「おまえの混ぜ方には真心がない。」

ちょうどその時、女子バレー部のKさんが、部員の下校が完了したことを報告に来ました。

するとU先生は、

「おい、K。久村さんにコーヒーを入れてやってくれ。」

「はい。」

Kさんは、いつものように気持ちのいい返事。

少し照れながら、私のためにコーヒーをいれてくれました。

—— Kさんの一つ一つの所作からは、飲む人への思いやりが感じられました。Kさんは、誰のために、何のためにコーヒーをいれるのかを深く理解しているように思いました。そして、コーヒーをいれるという、たったそれだけの「仕事」に「思い」をこめているとさえ感じられました。

30数年たった今でも、私はこの時のKさんの所作や表情を覚えています。



当時の先生方は皆ご退職され、今ではお会いする機会もなくなりました。ただ一人、「どんな味がするかな？」

と謎かけされたF先生は、今でも時折訪ねてきてくださいます。

最近では、私が教頭になって初めて勤務した鹿足郡の六日市中学校に、それから、校長になって初めて勤務した大東中学校、そしてここ頓原中学校にも、今年の5月にひょっこりと尋ねてくださって、私のコーヒーの味を確かめていかれました。

「おまえの混ぜ方には真心がない。」

というU先生の言葉を、私は、

「人を敬い、相手を思い、仕事に心をこめなさい。」

という教えとして心に刻んでいます。

